

2026.01.04.

## 「何を食べる為に生きるのか」

旧約 出エジプト記 16章1～5節

新約 ヨハネによる福音書 6章22～33節

### 1. はじめに

2026年最初の主の日を迎えています。ヨハネによる福音書から御言葉を受けます。アドベントやクリスマスがありヨハネによる福音書から御言葉を受けるのは11月16日以来ですので、今朝与えられた御言葉の少し前の所を振り返っておきましょう。

6章1節からのところで、イエス様いわゆる「5千人の給食」の奇跡を起こされました。5つのパンと2匹の魚で、成人した男だけで5千人、女性や子どもを入れれば1万人を優に超える人たちが満腹したという出来事です。この出来事は、イエス様の復活以外で4つの福音書全てに記されている唯一の奇跡です。そして、16節以下の所ではイエス様が水の上を歩くというあり方で弟子たちの所に行かれるという奇跡が記されております。この二つの奇跡は、ヨハネによる福音書において記されている7つの「しるし」うちの二つです。そして、この二つの「しるし」は一日の内に行われました。この「しるし」というのは、イエス様が神の御子であること、救い主であることを明らかに示す「しるし」ということです。どちらの出来事も、人間には出来ないことです。イエス様は確かに人間でしたけれど、ただの人間ではない。神の御子、つまり神であることを示す「しるし」でした。

今朝与えられております御言葉は、特に「五千人の給食」の出来事をもとにして人々とイエス様との対話が記されています。ヨハネによる福音書において、イエス様と弟子たちを含めた様々な人々との対話が記されております。しかし、どれもすれ違っていると言いますか、トンチンカンな会話になっています。ここでもそうです。どうしてそうになってしまうのか？それは、人々は自分の常識というものの中でイエス様を見るし、イエス様の言葉を聞くわけですけど、イエス様のお語りなることもイエス様ご自身も、私共の常識を超えています。ですから、ずれてしまう。ちょうど私共が最初に聖書を手にして読んだとき、「何を言っているのかさっぱり分からない」と感じたことと同じことが、イエス様と人々との間で起きているわけです。

### 2. イエス様を探して

さて、今朝与えられている御言葉ですが、22～24節はちょっとややこしいです。聖書の巻末にあります地図の6を開いてみてください。イエス様が「5千人の給食」の出来事を為されたのはベトサイダの近くです。そこから、弟子たちはカファルナウムに舟で行きました。イエス様はこの

時山に退いておられましたが、弟子たちが夜に強い風で難儀していますとイエス様が荒れた湖の上を歩いて近付いてこられました。弟子たちは恐れましたが、イエス様は「恐れることはない」と告げられ、イエス様は弟子たちの舟に乗り込まれ、カファルナウムに着きました。そして、「5千人の給食」の出来事に与った人々はイエス様を探しますが、もうベトサイダの近くにはおられませんでした。そこに、ティベリアスから数艘の小舟に乗った人たちが来ます。ティベリアスというのはカファルナウムから南に10キロメートルほど行った、ガリラヤ湖畔の町です。この人達は「5千人の給食」の出来事は知らなかったかもしれません。しかし、イエス様を探し、求めてきた人でした。ここにはおられないと知ると、「5千人の給食」を体験したい人たち、これは数艘の小舟に乗れたのですから、多くて10人程度だったと思われます。そして、カファルナウムに行き、そこでイエス様に会い、イエス様との対話が始まります。多分、ティベリアスから来た人たちは、この船の中で「5千人の給食」の出来事を聞いたことでしょう。そして、「エー、そんなことがあったのか」と驚き、いよいよイエス様に会いたいと思ったことでしょう。

### 3. イエス様は誰か？

ここで思い起こしておかなければならないことは、「5千人の給食」の出来事を体験した人々の中に、イエス様を王様として担ごうとした人たちが現れたということです。14、15節「**6:14** そこで、人々はイエスのなさったしるしを見て、『まさにこの人こそ、世に来られる預言者である』と言った。 **6:15** イエスは、人々が来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、ひとりでまた山に退かれた。」とあります。ここで、人々がイエス様を「世に来られる預言者だ」と受け止めたのは、申命記18：15にモーセの言葉として「**18:15** あなたの神、主はあなたの中から、あなたの同胞の中から、わたしのような預言者を立てられる。あなたたちは彼に聞き従わねばならない。」という言葉があり、このモーセに似た預言者こそ救い主であり、モーセがエジプトからイスラエルを導き出したように、自分たちをローマ帝国の支配から解き放ってくれる方だという理解、これを「メシア待望」と言っても良いでしょう、それが当時のユダヤの人々の中にあり、イエス様を王様に担ごうとしたということなのでしょう。しかし、イエス様はそれではご自身が来られた目的を達成できない、神様の御心に適わないので「山に退かれた」ということです。しかし、人々は諦めることなくイエス様を捜し求めてきました。

イエス様を王様に担ごうとした人々は、この「五千人の給食」をイスラエルが出エジプトの旅の間中与えられ続けた「マンナ」の出来事と重ねて受け止めていたに違いありません。そして、イエス様をモーセに重ねて合わせて受け止めたのでしょう。モーセが当時最強の国家であったエジプトからイスラエルを救いだしたように、イエス様がローマ帝国から自分たちを救い出しいてくれる方として見ていたということです。彼らはイエス様を見つけると「**ラビ、いつ、ここにおいでになったのですか**」と告げます。この言葉は「イエス様どこに行っていたのですか。もうど

こにも行かないでください。私達と一緒にいてください。あなたは、わたしたちの王となるべき方なのですから。」という思いが表れているように私には聞こえます。

#### 4. 「しるし」か「パン」か？

それに対してイエス様は、彼らを全く歓迎しませんでした。イエス様の「はっきり言うておく」と語り始めます。この言葉は直訳すれば「アーメン、アーメン、私は言う」です。イエス様は大切なことを告げるときに、このように語り始められます。これは「とても大切なことだらよく聞きなさい」ということです。そして告げました。26節「**あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。**」つまり、「あなたたちはあの『5千人の給食』を私が神の子であることの『しるし』として受け止めたのではない。そうではなくて、自分の腹が満腹したから、自分の腹を満足させてくれる人として私を求めているだけだ。しかし、私はあなた方の腹を満たすために来た者ではない。」そう告げられたわけです。イエス様を捜し求めて来た人たちは、「イエ、イエ。わたしたちはあなたがモーセのような預言者だと信じています。決して、ただ自分の腹を満たしてくれる方とだけ受け止めているわけではありません」と思ったでしょう。しかし、イエス様はそもそも、「モーセのような預言者」ということで受け止めていることが、全くお門違いなことだと分かっていました。「モーセのような預言者」ということが何を意味するのか、そこに決定的な違いがあったということです。人々が問題にしていたのは「パンの問題」です。「パンの問題」とは、現代の言葉で言えば「経済問題」ということになるのでしょうか。これを何とかするのは、政治家の仕事です。イエス様の時代で言えば王様の仕事です。ですから、彼らはイエス様を王様として担ごうとしたわけです。確かに、イエス様は「まことの王」として来られました。しかし、イエス様の国は「この世の国」ではありません。「神の国」です。しかし、彼らは「神の国」もこの世界の国だと理解していました。しかし、「神の国」はいわゆるローマ帝国とか日本とか中国とかアメリカ合衆国といった「この世の国」ではありません。イエス様は「神の国の王」として来られました。もし、イエス様の国がこの世の国であったならば、その国はたとえローマ帝国を滅ぼしたとしても、やがては滅びます。この世の国というものは、どんなに栄華を極めたとしても、やがては滅んでいくものです。「**見えるものは過ぎていく**」(コリントⅡ 4:18)ものだからです。しかし、イエス様の国は滅びることはありません。「神の国」だからです。

#### 5. 朽ちるパンか、永遠の命に至るパンか？

更にイエス様は踏み込んで告げられます。27節「**朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子（イエス様）があなたがたに与える食べ物である。**」これは「あなたたちは、何のために生き、何を食べる為に働くのか？」という問いを含んでいます。これは私共の人生の意味を問う、重大な問いです。しかし、こ

の問いに対しての答えは学校では教えてくれません。私はこれをはっきり教えることが出来るというところに「教会学校の使命」ならびに「キリスト教学校の使命」があると思っています。

宗教改革者カルヴァンは青少年のために「ジュネーブ教会信仰問答」というものを作りまして、信仰の筋道を教えました。その問い1は「人生の主な目的は何ですか？」答え「神を知ることあります」とあり、問い3に「では人間の最上の幸福は何ですか？」答え「それも同じであります」とあります。「神を知る」とは、神さまを拝み、畏れ、敬い、愛し、信頼し、お従いする方として知るという意味です。それが人生の目的であり、最上の幸福なのだと教える。これは実に深い真理を告げています。神なき世界に生きるならば、人間は過ぎ去っていく目に見えるものだけを求め、生きる本当の目的を見失い、幸福に至ることが出来ない。そう教えます。これは教会でしか教えることが出来ない深い知恵の言葉です。

元日礼拝の後、夕方から宮崎神宮に妻と二人で行って来ました。30日、31日と葬式が入ったものですから、ずっとパソコンの前に座っていて、運動不足の解消のつもり歩いて行きました。勿論、初詣に行ったものではありません。初詣に来ている人たちを見に行ったわけです。自分たちはどういう状況の中で伝道しているのか、そのことをはっきり知るためです。思ったよりもたくさんの人たちが来ていました。私共の元日礼拝に来られた人は11名でしたので、この人数の差にアララと思いましたけれど、逆に私共の使命というものを新たにさせていただきました。あれだけの人たちは、いったい何を願ったのか。多分、「家内安全、商売繁盛」若い人は「受験合格、恋愛成就、安産祈願」といったところで、その祈りの8、9割はカバーされるでしょう。これが悪いというわけではありません。しかし、これらは私共にとっての「第一の願い」にはならないだろうと思います。私共は元日礼拝を捧げましたけれど、そこで与えられました御言葉は「**誇る者は主を誇れ**」がありました。神様の子・僕とされている。この恵みを感謝し、この恵みの中に生き切ることができるようにと祈り願う。私共には何もなくて良い。イエス様がおられるのだから、それでいい。それで十分。私共は「**朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働く**」ことこそ大切なのだということを知っているからです。

## 6. 神の業は、イエス様を信じること

さて、人々はイエス様の言葉を受けて「**神の業を行うためには、何をしたらよいのでしょうか**」と問います。きっと、彼らとすれば「私達だって、目に見えるものだけを求めているわけではありません。神様の御心に従うことが大切だということぐらい知っています。」という思いだったでしょう。そして、イエス様の口から出るのは「神の業を行う為には、律法を守りなさい」という言葉であるに違いないと彼らは思っていたでしょう。それが彼らの常識でしたから。しかし、イエス様が告げられた言葉は全く違っていました。「**神がお遣わしになった者（つまりイエス様）を信じること、それが神の業である。**」とイエス様は告げられました。どんな良き業に励むことよりも、イエ

ス様を神の御子・救い主として信じること。それこそが神様の御心に適うことであり、それは神様ご自身が与えてくださることであり、「神の業」なのだと告げられました。そして、これこそがあなたたちを「永遠の命」に至らせると告げられました。そして、この「イエス様を信じる」とは、イエス様を神の御子として拝み、畏れ、敬い、愛し、信頼し、お従いする方として信じるということです。イエス様との愛の交わりに生きるということです。そこに、永遠の命に至るただ一つの道があります。

## 7. 偶像礼拝ではなく

それに対して人々は「それでは、わたしたちが見てあなたを信じることができるように、どんなしるしを行ってくださいますか。どのようなことをしてくださいますか。 6:31 わたしたちの先祖は、荒れ野でマンナを食べました。『天からのパンを彼らに与えて食べさせた』と書いてあるとおりです。」と答えます。結局、彼らはあの「5千人の給食」を求めている。「しるし」を求めていることがここで明らかにされてしまいました。しかも、「マンナはイスラエルの荒野の40年の旅の間中与えられたものですから、あの『5千人の給食』の出来事を何度も何度もやってください。そうしたら信じます。」と告げたわけです。これでは結局のところ、「私の求めることをしてくれたのなら信じます」ということになってしまいます。これでは「私の望みをかなえてくれるためのイエス様」ということになってしまいます。イエス様が最初に「あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。」告げられたのは、こういうことだったのです。何度「しるし」を行っても、人間の欲というものは限りがありません。そして、この自分の欲を満たすために神様を利用する。それではいつになっても、イエス様を神の御子として畏れ、敬い、愛することにはなりません。これが「偶像礼拝」です。偶像礼拝の本質は、目に見える像を拝むかどうかというところにあるのではなくて、自分の求めるものを満たしてくれるものを神とするということです。人間の自然に生まれる信仰心というものは、結局、偶像礼拝にしかないのでしょう。人は「永遠の命」ではなく、目に見えるパン、朽ちるパンしか求めないからです。ここに、私共の罪があります。朽ちるものにしか興味がない、見ようとしなない、求めることさえない。しかし、イエス様が私共に与えようとされたのは「永遠の命」です。私共の地上の命は必ず終わります。しかし、その肉体の死によっても終わることのない命、イエス様と共にある命、復活の命、これをイエス様は与えるために来られました。これを求め、これを目指して生きる。そこに私共の新しい命があります。

## 8. 神のパン

イエス様はこう告げられました。32. 33節「はっきり言うておく。モーセが天からのパンをあなたがたに与えたのではなく、わたしの父が天からのまことのパンをお与えになる。 6:33 神の

パンは、天から降って来て、世に命を与えるものである。」イエス様は「マンナを与えたのはモーセではない。わたしの父である天の神様だ。」と告げます。ここではっきり「自分は天の神様の御子である」とここで告げられました。そして、その神様が「まことのパン」「神のパン」「世に命を与えるパン」、つまり「永遠の命に至る食べ物」を与えるのだと告げられたわけです。では、この「命のパン」とは何でしょう。35節でイエス様は「わたしが命のパンである。」と告げられました。イエス様が私共に命を与えてくださるパンであるということは、私共はイエス様を食べることによって命を得るということです。実に、イエス様を信じるということは、イエス様を食べて、イエス様と一つの命に結ばれることです。信仰はイエス様を信じる気持ちではありません。そのような私共の気持ちが信仰だというのであれば、私共の救いの確かさはどこにあるでしょう。私共の信仰はいつでも揺らいでばかりですから、昨日の私は救われるけど、今日の私はダメだということになりかねません。しかし、信仰というものは、そんなあやふやなものではありません。もっと堅固で、揺らぐことなく、確実に私共を永遠の命へと導くものです。信仰は、神様の永遠の選びによって私共に与えられた、イエス様と一つに結び合わせてくださった神様の業そのものだからです。私共はこの神の業としての信仰によって救われます。「私の信仰によって」ではなく、「神の御業としての信仰」によってです。そして、そのことを目に見えるあり方で私共に示してくださった出来事が、今朝、私共が与る聖餐です。この聖餐において、私共は「命のパン」であるイエス様を食べ、イエス様の命である血に与ります。イエス様と一つにいただいたのですから、イエス様が復活されたのならば、私共も復活します。イエス様が永遠に生きられるのであるならば、私共も永遠に生きることになります。これが私共に与えられている「救いの現実」「救いの恵み」というものです。まことにありがたいことです。この恵みに感謝して、共に神様に祈りを捧げましょう。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に満ちたもう、全能の父なる神様。

2026年最初の主の日の礼拝を、愛する兄弟姉妹と共に御前に捧げ、あなた様の御言葉を受けることが出来ましたことを感謝します。私共は目に見えるものが全てであるかのような思い違いをしてしまう愚かな者です。しかし、あなた様はその様な私共が永遠の命に至ることが出来るようにと信仰を与えてくださいました。御子イエス・キリストの命と一つに結んでくださいました。ありがとうございます。この恵みをしっかり受け止めて、イエス様を「我が主・我が神」として拝み、畏れ、敬い、愛し、信頼し、お従いして、一日一日を歩ませてください。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン